

DAS KAPITAL

資本論

カール・マルクス

社会科学研究所 監修
資本論翻訳委員会 訳

1

新日本出版社

カール・マルクス

資 本 論

1

第一卷 第一分冊

社会科学研究所 監修

新日本出版社

資 本 論——第1分冊 (全14冊)

1982年11月15日 初 版
1982年12月30日 第6刷

定価 750円

監 修 者 日本共産党中央委員会付属
社 会 科 学 研 究 所
訳 者 資 本 論 翻 訳 委 員 会
発 行 者 松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8
発行所 株式会社 新日本出版社
電話 東京 (478) 3311
振替番号 東京3-13681
印刷 光陽印刷 製本 みさと製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布
することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社
の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

凡 例

一 本書は、カール・マルクス著『資本論』第一―第三部の全訳であり、新書判全一三分冊で刊行され、総目次・総索引を収めた別冊がこれに加わる。

二 翻訳にあたっては、ドイツ語エンゲルス版を主たる底本としてドイツ語各版のほか、英語版、フランス語版、ロシア語版その他各国語諸版を照合または参照の上、訳出した。(訳出に使用された各国語諸版については本凡例末参照) また、従来の邦訳はすべて参照した。

三 注については、マルクス、エンゲルスによる原著者注は()に漢数字を用いてそれを示し、各段落のあとに訳出した。なお、訳文中や、*印によつて訳文のあとに、()を用いて挿入されたものはすべて訳者による注および補足である。これらは今回の訳出にあたり独自に作成された。

四 訳注のなかで、「邦訳『全集』、第〇巻、〇〇ページ」とあるのは、ドイツ民主共和国ドイツ社発行の『マルクス・エンゲルス著作集』^{ツエルケ}を底本とした邦訳『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店)の巻数とページ数をさしている。

五 『資本論』のドイツ語原文にあたりとする読者の便宜のために、わが国で現在入手の容易なツエルケ版『資本論』(ディーツ社)の原書ページ数を、訳文の欄外上に()を用いて付記した。

六 訳文中の“ ”でくくられた語、句、文は、すべて、原著者によってドイツ語以外の国語（ラテン語などを含む）が単独で使用されている個所の訳である。なお、それらドイツ語以外の国語による語、句、文が、同じ意味のドイツ語と併記されていて、相互の言い換えとして使用されている場合には、それらにニュアンスの相違がある場合をのぞき、該当の他国語の訳出や明示を省略した。文意を理解するうえで必要な場合には、原語がそのまま示されている。

七 原著者の引用文にその原典との相違がある場合には、原則として原著者の引用により訳出し、必要な場合には訳注によりその異同を示した。

八 引用文献のうち邦訳のあるものは、入手の便宜なども考慮し、適当と思われるものを〔 〕を用いて掲げた。ただし、訳文については、掲げた邦訳書のそれに必ずしもよっていない。

九 訳文で、傍点を付した部分は原文のイタリック体の部分を表わしている。

一〇 人名、地名等については、それぞれの国での発音の再現にとめたが、わが国での慣用に従ったものもある。

二 本訳書については日本共産党中央委員会付属社会科学研究所が監修を行なった。研究所の委嘱により、五〇名を超える研究者が訳出に参加し、翻訳のための委員会が組織され、さらに経済学以外の領域の研究者多数の協力を得た。翻訳者は各分冊ごとに訳出グループを編成し、すべての分冊にわたる全体の協議会、分冊グループ内あるいは若干の分冊グループ相互の検討会が行なわれ、分冊ごとに作成された訳稿を、さらに独自に編成された全巻にわたる編集・統一者グループがあらため

て全体との関連から詳細に検討を加えたうえ、分冊グループとの協議を繰り返して完成稿とした。それらの作業の過程で、経済学以外の学問の研究者から提出された意見が参考にされた。

本分冊（第一分冊）については、各分野の研究者の協力を得ながら、左記の体制で訳出・編集が行なわれた。

翻 訳 者 種 類 茂（序文） 平井規之（第一―三章）

編集・統一者 岡本博之 宇佐美誠次郎 土屋保男 杉本俊朗

（付） 第一巻の翻訳にあたって使用された各国語版

ドイツ語版については、初版、第二版、第三版、第四版、カウツキー版、インステイトゥート版、ヴェルケ版を利用し、また、以下の各国語諸版を照合または参照した。英語版（モスクワ版、ドウナ・トー版、ペリカン版、ポール版、カー版、ゾンネンシャイン版）、フランス語版（ロワ版、エディション・ソシアル版、コスト版）、ロシア語版（サチネーニヤ版、ステパーノフ版）、さらに、スペイン語版（メキシコ版、アルゼンチン版）、イタリア語版（リウニティ版、ウテート版）、中国語版、朝鮮語版、ポーランド語版、チェコ語版、ハンガリー語版、ルーマニア語版、ブルガリア語版、フィンランド語版、ほか。

目次

| | | |
|-------------------------------------|-------|----|
| 序言〔初版への〕 | マルクス | セ |
| あと書き〔第二版への〕 | マルクス | 一五 |
| 〔フランス語版への序言とあと書き〕 | マルクス | 三 |
| 第三版へ | エンゲルス | 四 |
| 編集者の序言〔英語版への〕 | エンゲルス | 元 |
| 第四版へ | エンゲルス | 六 |
| 第一部 資本の生産過程 | | |
| 第一篇 商品と貨幣 | | 九 |
| 第一章 商品 | | 九 |
| 第一節 商品の二つの要因——使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ） | | 九 |
| 第二節 商品に表わされる労働の二重性 | | 七 |

| | |
|-------------------------|-----|
| 第三節 価値形態または交換価値 | 106 |
| A 簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態 | 108 |
| 1 価値表現の両極——相対的価値形態と等価形態 | 108 |
| 2 相対的価値形態 | 109 |
| a 相対的価値形態の内実 | 109 |
| b 相対的価値形態の量的規定性 | 110 |
| 3 等価形態 | 110 |
| 4 簡単な価値形態の全体 | 110 |
| B 全体的な、または展開された価値形態 | 107 |
| 1 展開された相対的価値形態 | 107 |
| 2 特殊的等価形態 | 109 |
| 3 全体的な、または展開された価値形態の欠陥 | 109 |
| C 一般的価値形態 | 111 |
| 1 価値形態の変化した性格 | 111 |
| 2 相対的価値形態と等価形態との発展関係 | 115 |
| 3 一般的価値形態から貨幣形態への移行 | 118 |
| D 貨幣形態 | 119 |

| | | |
|-----|---------------|----|
| 第四節 | 商品の物神的性格とその秘密 | 一三 |
| 第二章 | 交換過程 | 一四 |
| 第三章 | 貨幣または商品流通 | 一六 |
| 第一節 | 価値の尺度 | 一六 |
| 第二節 | 流通手段 | 一七 |
| a | 商品の變態 | 一七 |
| b | 貨幣の通流 | 一八 |
| c | 鑄貨。価値章標 | 二一 |
| 第三節 | 貨幣 | 二九 |
| a | 蓄藏貨幣の形成 | 三〇 |
| b | 支払手段 | 三六 |
| c | 世界貨幣 | 四二 |

第一卷分冊目次

第一分冊

第一部 資本の生産過程

第一篇 商品と貨幣

第一章 商品

第二章 交換過程

第三章 貨幣または商品流通

第二分冊

第二篇 貨幣の資本への転化

第四章 貨幣の資本への転化

第三篇 絶対的剰余価値の生産

第五章 労働過程と価値増殖過程

第六章 不変資本と可変資本

第七章 剰余価値率

第八章 労働日

第九章 剰余価値の率と総量

第三分冊

第四篇 相対的剰余価値の生産

第一〇章 相対的剰余価値の概念

第十一章 協業

第十二章 分業とマニユファクチュア

第十三章 機械設備と大工業

第五篇 絶対的および相対的剰余価値の生産

第十四章 絶対的および相対的剰余価値

第十五章 労働力の価格と剰余価値との大きさの変動

第十六章 剰余価値率を表わす種々の定式

第六篇 労働

第十七章 労働力の価値または価格の労働への転化

第十八章 時間賃金

第十九章 出来高賃金

第二〇章 労賃の国民的相違

第四分冊

第七篇 資本の蓄積過程

第二一章 単純再生産

第二二章 剰余価値の資本への転化

第二三章 資本主義的蓄積の一般的法則

第二四章 いわゆる本源的蓄積

第二五章 近代的植民理論

資
本
論
經
濟
學
批
判

第一卷 第一部 資本の生産過程

忘れがたきわが友

勇敢、誠実、高潔なプロレタリアート前衛戦士

ヴィルヘルム・ヴォルフ

一八〇九年六月二一日、タルナウに生まれ

一八六四年五月九日、亡命のうちにマンチェスターに没す

にささぐ

(11) 序 言〔初版への〕

私がここに第一巻を公刊するこの著作は、一八五九年に刊行された私の著書『経済学批判』の続きである。はじめと続きとのあいだの長い休止は、私の仕事を繰り返して中断させた長年にわたる病氣のためである。

あの以前の著書の内容は、この巻の第一章〔本書の第一篇にあたる〕に要約されている。そうしたものは、連関をつけ完全にするためだけではない。叙述が改善されている。以前には暗示されただけの多くの点が、ここでは、事情がなんとか許す限り、さらに進んで展開されており、また逆に、そちらでは詳しく展開されたことが、ここでは暗示されるにとどまっている。価値理論および貨幣理論の歴史にかんする部分は、こんどは当然に全部なくなっている。とはいえ、以前の著書の読者は、第一章の注のなかに、あの理論の歴史のための新たな諸資料が示されているのを見いだすであろう。

すべてはじめはむずかしい〔ドイツの諺〕ということとは、どの科学にもあてはまる。だから、第一章、ことに商品の分析を収める節〔本書の第一章にあたる〕の理解は、もっとも困難であろう。さらに立ち入って、価値実体と価値の大きさととの分析にかんして言うなら、私はその分析をできる限り平易にし